



TITLE:

W・ベンヤミンのソネット:反復と目覚め

AUTHOR(S):

小林, 哲也

CITATION:

小林, 哲也. W・ベンヤミンのソネット:反復と目覚め. 文明構造論: 京都大学大学院人間・環境学研究科現代文明論講座文明構造論分野論集 2012, 8: 35-73

ISSUE DATE:

2012-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160418>

RIGHT:

W・ベンヤミンのソネット ——反復と目覚め——

小 林 哲 也

はじめに

1981 年、ベンヤミンの書簡編集に深く携わり思想家としても有名なジョルジョ・アガンベンは、パリ国立図書館で、ベンヤミンが書いた多数の詩を発見した。その多くが若くして自殺した友人に捧げられたそれらの詩は、全部で 70 余りにものぼり、すべてソネット形式によって書かれた。これら 1915 年から 25 年までの間断続的に書き継がれたソネットには、その間のベンヤミンの思考の展開の痕跡を見出すことができる。

ベンヤミンのソネットは、いくつかの例外を除けば、すべての詩がエンデカシラボ詩行で書かれ 4 行 4 行 3 行 3 行の 4 連形式をとっている。全篇にわたってソネットの形式をくずさずに書き上げられているのが印象的である。大きく三つに分けられているソネットの第一群は、自殺した友人ハインレに捧げられている。この 50 編はベンヤミン自身によって内容に応じた 13 のグループ¹に分けられて構成された。第二群の 9 篇は、様々な内容で、それ自体一つの「詩学 *ars poetica*」² として見ることができ、

¹ Vgl. Benjamin, Walter: *Gesammelte Schriften*. Hrsg. v. Tiedemann, Rolf u. Schweppenhäuser, Hermann, Frankfurt am Main 1991, Bd. I.–VII., hier, Bd. VII. S. 575. 以下、ベンヤミン全集からの引用に際しては、略号 *GS*. とともに巻号、ページ数を本文中に記す。

² Vgl. Tiedemann, Rolf: Nachwort. In: Benjamin, Walter: *Sonette*. Frankfurt am Main 1986, S.85-96, hier S. 88.

第三群の 14 篇は再びハインレに捧げられている。³

ソネットは、もちろん哀悼や郷愁、悲しみやかつての喜びといった感情と無縁に成立したものではない。だが、ベンヤミン自身の言葉を借りれば、それは「感情の漠たる延び広がり」によって出来た「自然物」あるいは「自然とも芸術とも無縁のこしらえもの」ではない（『フリードリヒ・ヘルダーリンの二つの詩』 *GS. II. S. 107*）。感情がソネットという形式に規定されて再編されるのはもちろんのこと、それは、ベンヤミン自身に息づく構成原理とでもいうべきものに従って詩へと構築されている。ソネットを貫いて反復されるのは、昼と夜、動と静、響きと沈黙といった二極の間で展開される思考あるいはイメージの運動である。友人である「お前」の「死」とその「名」をめぐって、哀悼の祈りをソネットは反復する。繰り返し行われては無に帰するように見えるその運動、消えたかと思えばまた浮かび上がる祈り——本稿では、これらに見て取れるベンヤミン固有の思考の展開を追う。

ソネットは「追想」において、過ぎ去ったものに孕まれていたものを新たに甦らせる。『プルーストのイメージについて』や『歴史の概念について』、あるいは『パサージュ論』で後にみられるような過去へのこだわりが、なぜベンヤミンにおいて生じているのか——ソネットはこの問いを解く鍵である。あるいは、ベンヤミンが、なぜ無際限に続けられるアレゴリーの遊戯に、救済へと向かって反転する契機を見て取ろうとするのかも、ソネットには示されている。粘り強い思考の反復の中で、目覚めてくるものを待つという、ベンヤミンの特質がそこに刻み込まれている。以下でこのことを見ていこう。

³ ソネット群は紙束の形で残されていたが、それぞれの詩の成立年代は不詳である。ただし、どのような紙に記されているか、どのような文字で書かれているかによって、一部のソネットの執筆時期の推定はある程度可能である。Vgl. *GS. VII. S. 573f.*

1 反復する「響き」と「沈黙」

1-1 ソネットとベンヤミンの思考

ソネットが発見された後、これについて論じたボイエはこの「抒情的作品」と他のもろもろの「哲学的作品」にみられるベンヤミンの思考との関係について「相互に反射し合っているのだが、しかし、その鏡面は平坦なものではない」と言っている。⁴ 彼のいうようにソネットは単純にベンヤミンの「哲学的作品」に合致する内容をもっていると見ることはできない。ボイエは次のように言う。「或るソネットは『崇高な名前はこわばった死に装束』という詩行で閉じられる。＜名＞という符牒が名指されると同時に詩へと流れ込むものを、最後の詩節におけるイメージが再び押し戻す。ベンヤミンにおいては、＜名＞が哲学的連関体系において取り上げられていたが、その体系がここで揺り動かされている。体系の範型は、ちょうど回転する万華鏡の中のガラス石のように、変化している」。⁵ 『言語一般および人間の言語について』（以下『初期言語論』と略する）で語られる「名」は、神の創造した存在の精髓のような位置を占めており、ベンヤミンの思想において重要な意義をもつ。ソネットにおいても、この「名」が重要な意義をもっているのだが、しかしそこでの「詩人はアダムのような命名者ではない」。⁶ 『初期言語論』においては、「名」において言語の絶対的伝達が成就されるように語られているのに対し、ソネットでは、そういった伝達を求める動きはそのままに、その不可能について繰り返し歌われている。むしろ、そうした不可能に直面してからの思考の緊張とゆらぎに焦点が当たる。以下ではまず、『初期言語論』との比較においてソネットの読

⁴ Boie, Bernhard: Dichtung als Ritual der Erlösung. Zu den wiedergefundenen Sonetten von Walter Benjamin. In: *Akzente*. Jg. 31, Bd. 1, München 1984, S. 24.

⁵ Boie: ebd.

⁶ Tiedemann: a. a. O. S. 93.

解をすすめていこう。

1-2 「名」の「叫び出し」、「名」の「呼び掛け」

『初期言語論』において、ベンヤミンが『創世記』の記述を援用しながら述べていたところによれば、神はその名づけによって事物の創造を完成させていた。創世記にみられる創造は、「<成れ！>、そして神はつくりたもうた、神は名づけたもうた」（GS. II. 148）という3拍子のリズムでなされる。ここで、リズムの最後に与えられる「名 Name」は、神の創造的な「言葉」を起源とするもので、いわば自らの本質を自ずと語りだす輝かしいものである。存在に与えられた「名」は、単なる記号、単なるそのつどの符牒ではなく、自らの本質を十全にそのうちに内包し、それを外部へと展開するものとして考えられている。「名」はちょうどライブニッツのいうモナドがそのうちにすべての本質を内包させるような具合に存在している。⁷ 「樂園」において、自然や事物は、神に由来する「名」を、自らを伝達する精髓を、つまり「言語的本質」を自らのうちに内包させて安らっている。ソネットにおいても、この「名」が重要な位置におかれている。第一群の冒頭におかれたソネットは、死者である「お前」への呼びかけではじまり、お前の「聖なる名」についての詩句で閉じられる。

時間から私を解放してくれ、そこへ消え去っていったお前よ／そして
私の内から、お前の近しさを、解き放ってくれ／黄昏時に咲き誇る赤
いバラが／事物との生ぬるい婚姻から離脱していくように

⁷ このことについては、『ドイツ悲哀劇の根源』の「認識批判的序論」で言われる「理念はモナドである」（GS. I. S. 228）ということの意味と合わせて、さらに検討される必要がある。

真の誓い、苦しい気分といったものは／朗らかな私には無用だが、唇にはバラの赤さが欠けている／その赤さは、微かなきらめきによって燃え立っていた／髪黒さのために、困窮の星が紫の影を落としている

イメージの写しもやはり私には禁じられている／お前の私への怒りも称賛も／お前が将校のように歩んだ道も映せない

お前が掲げる旗の標徴が測りとられるのは／お前が、ただ私のうちに、お前の聖なる名を建立するとき／イメージを欠きながら、祈りの言葉を際限もなく建立するように（GS. VII. S. 27f.）。

最初のソネットに限らず全篇にわたって「お前」への呼び掛けが繰り返される。バラが黄昏時に、他の事物から際立ってきて赤くほのかに光るように、「お前」を失った「私」の心を解放してくれと私は呼び掛ける。だが、解き放つ赤さが欠けている。そして、「お前」との間にかつて浮かんでいた「イメージ Bild」、あるいは再びそれを映し出す「イメージの写し Abbild」を再び映し出すことが、「私には禁じられている」。しかし「イメージを欠いてはいても」「名が打ちたてられる」のであれば、栄光を告げる「旗の標徴が測りとられる」こともあるのかもしれない。いずれにせよ、冒頭から「名」は重要な「標徴 Sinnbild」と関わるものとして歌われている。ソネットの読解において問題となるのは、この「名」と「イメージ」、そして「標徴」がどのように関連し展開していくのかである。

ソネットにおいては「私」が「名」を「呼び掛け」、「お前」がその「名」を打ち立てるという状況が想定されている。『初期言語論』においてはどうかだろうか？ そこでは「神」の創造の3拍子の最後に事物は「名」

を与えられていた。だが事物は、「音声言語」——認識・分節して発話する言語——を欠いているため「言語そのものは、事物においては、完全に言い尽くされることがない」(GS. II. 147)。ベンヤミンは『創世記』の記述⁸を踏まえつつ、「神の言葉」に由来する事物の「名」が、完全に外側へむかって自らを語りだすのは人間の「名づけ」においてなのだと論じる。「創造」の完成としての「名づけ」を、「神」は人間に委ねる。被造物の「名」が完全に自らの存在とその本質を「叫び出す＝言い尽くす *ausrufen*」のは、人間が「呼び掛ける *anrufen*」こと、そして「名づける *benennen*」ことにおいてである。「名」において、名づける者に「呼び掛け *Anruf*」られるという「受容性」と、自らの「叫び出し *Ausruf*」という「自発性」とが一つになっている。

名は、言語の究極の叫び出しであるのみならず、また言語に固有の呼び掛けでもある。したがって、名において、言語の本質法則が現れる。それによれば、自ら自身を言い尽くすことと *sich selbst aussprechen* と、他のすべてのものに呼び掛けること *alles andere ansprechen* が同じことになる (GS. II. 145)。

ここで「名」において、「自発性」と「受容性」とが「未分化」のまま「唯一無比の結合」を保ちながらの伝達 *Mitteilung*、あるいは分かち合い *Mit-teilung* という「出来事」が生じているということができる。⁹ だが、ソネットでは、むしろ、呼び掛ける「私」と呼び掛けられる「お前」との間にはこのような「絶対的媒介」あるいは宥和の瞬間は生じない。

⁸ 「主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった」『創世記』(新共同訳) 2-19。

⁹ 森田園『ベンヤミン——媒質の哲学』(水声社 2011 年) 111～121 頁参照。

1-3 「名」の沈黙

「名」は、単に内在する「本質」を顕現させるだけではない。たとえば死者たちの「名」は、顕在化していないもの、もはや失われたもの、かつてそこに潜在していた創造性、行為を、いわば記憶として呼び返す場としてある。そこでは、かつてのイメージのみならず、もしかして生きていればあり得ただろうイメージ、あるいは、かつて結ばれてしまった不幸とは別のイメージが喚起されることもあるだろう。「名」は「孤独と怠惰とが必然的なものでなかったとしたら、あるいは可能であったかもしれないものの印」(GS. II. S. 624)としてあるのである。「お前」、すなわちフリードリヒ・ハインレという青年は、あとで詳述するように、すでに自殺していなくなってしまう。だがその「名」は過去のイメージを想起させるのみならず、そこから別のイメージも喚起させうるはずである。そのことによって、哀悼が満たされ、死者が救済されるということもありうるかもしれない。最初のソネットに即して言えば、禁じられて、失われたバラの「イメージ」は、「聖なる名」において、「際限のない祈り」において、再びかつての「赤さ」を甦らせるのかもしれない。「お前」と「私」の関係——「怒りと称賛」——も再び結ばれるのかもしれない。ベンヤミンは「名」を媒体として、失われたイメージと結びつきを、呼び返すのである。ソネットにおいては、こうした呼び掛けがもたらす予感だけではなく、呼び掛けが虚しく終わってしまう経験も語られる。死者と生者の間にある一枚の衣を通した疎隔の中では、呼び掛けは届かない。「名」は衣をまとう肉に喩えられている。「死装束」となった「衣」は「青き甲冑」と化して、「嘆き悼む者」から「名」を守り通す。

腐らずに残る死者たちの衣／唯一つ、衣擦れの秘められた音／失われ

ることなき名前、それを衣は自らの肉とする／死者たちはその新たな
装いでお前のうちに入り込む

衣は何ものも通さずに守り／恐怖を見越して生へと呪縛される者には
自らを任せることはない／鋼の輝く青き甲冑と化した衣は、その守
りの壁で／鏡に映るイメージが見せる過去を弾き飛ばす

美しき者たちがお前をまとうのは／嘆き悼む者たちの魂が無駄に近
づかぬように／彼らのためにお前は光を反射させる

照り返しはやはり途方もない仕方で事物を死なしめ／そして、より秘
められた者たちを内側で生かす／崇高な名前は硬い死装束 (GS. VII.
S. 57f.)。

「硬い死装束」と化してしまった「お前」、そしてその「崇高な名前」は
「嘆き悼む者たち」が近づかぬように光をはねかえす。復活への憧れ、あ
るいは安らかな永遠をねがったの哀悼の呼びかけは、なすすべもなく反響
し、死者の「名」は「沈黙」をもって内側に閉ざされている。この「沈黙」
のうちに生かされている「美しき者たち」との関係、この「秘められた者
たち」との関係をどのように考えるべきだろうか。

1-4 絶対的表出の理念とその諦念

ベンヤミンは、すでに 1913 年冬から 14 年初頭に書かれた『若さの形而上学』で、「沈黙」というモチーフに大きな意義を与えていた。ここで
ベンヤミンは己をむなしく語るだけの言語を批判的に扱い、そこからはず

りぬけていく「沈黙」に着目していた。¹⁰ さらに、創造を自負する「天才 Genie」の言語が、「記憶」をもたず、対話の中で見過ごされて「瓦礫」として積もった「沈黙」をとらえられないことを指摘している。¹¹ 「天才」批判には、ホモソーシャルな男性同盟における男性優位の言説を脱臼させようという意図、¹² 「青年文化」が若さの創造性を物神化する「青年崇拜」に転じていること——ハインレにもこの傾向が指摘される¹³ ——への危機の意識¹⁴ が見て取れる。自らが所有する意味を胚胎させようという男性的「天才」に、ベンヤミンは「ゲーニウス Genius」を対置している。「ゲーニウス」は、相手に「孕ませる」ような形で創造に関与するのではなく、むしろ「沈黙」を自らのうちに受容する形で創造に関わる。¹⁵ ハインレの死以前のベンヤミンは「沈黙」に逆説的ながら積極的に「創造性」を見て取っている。それゆえ、例えば小野寺賢一が言うように、「沈黙」を内包

¹⁰ ここで求められていた「理想的対話形式」がソクラテス批判につながっていくことに関しては以下のものを参照。小野寺賢一「沈黙の対話術——青年期ベンヤミンの「対話」の理念にみられる絶対的表出の構造」：早稲田大学『ワセダ・ブレッター』12号、2005年、44～64頁。小野寺は「沈黙」を初期ロマン主義者たちの「絶対的媒質」についてのベンヤミンの思想（『ドイツロマン主義における芸術批評の概念』）へと発展するものとしているが、むしろ「沈黙」が「悲しみ」と切り離せなくなることで、その質を変化させ、言語論・アレゴリー論へと展開していくことを見るべきではないかと思われる。

¹¹ ここには、すでにベンヤミン独特の仕方ですら「過去」にこだわる思考の萌芽がある。通例であれば来たるべきものと合わせて考察される「若さ」——たとえば、ヴィネケンであれば、これから実現されるべき精神との関わりで「若さ」を語る——が、ここでは取りこぼされてしまったものとの関わりにおいて考察されている。

¹² Vgl. Weigel, Sigrid: >Weiblich-Gewesenes< und der >männliche Erstgeborene seines Wekes<: Zur Bedeutung der Geschlechterdifferenz in Benjamins Schriften. In: Amstutz, Nathalie u. Kuoni, Martina (Hg.): *Theorie-Geschlecht-Fiktion*, Basel 1994, S. 89-104.

¹³ Vgl. Göring, Reinhold: Die Sonette an Heine. In: *Benjamin Handbuch*. Stuttgart/ Weimar 2006, S. 585-591, hier S. 588

¹⁴ ベンヤミンの当時の婚約者グレーテ・ラートは、『アンファンク』でこの違いについて書いており、ベンヤミンもこの認識を共有していたように思われる。Vgl. GS. II. S. 873.

¹⁵ 「ゲーニウス」の「受容性」については、岡本和子「韻と名——ヴァルター・ベンヤミンにおける抒情詩という形式について」：明治大学『文芸研究』94号、2004年、162～188頁も参照。

した「理念的対話形式」が、「絶対的表出」なのだと見ることも可能である。

だが、ベンヤミンの思考においてはこのような「絶対的表出」と同時に「表現なきもの」による「中断」の契機、あるいは「伝達の流れ」の中で、「押し黙り」を余儀なくされるものの存在がつねに語られる。ある種の絶対的な媒介の直接性 *Unmittelbarkeit* が求められつつも、それがかなわず、むしろその不可能をもっとも鮮明に告げる「中断」点に、別の可能性をみていくというのが、ベンヤミンの思考だと言える。

この絶対性とその不可能性という両極が、ソネットの展開構造を形成している。結局は「絶対的表出」の一契機としてあったと見ることも可能なかつての「沈黙」¹⁶ とは異なり、ソネットにおける「沈黙」は、絶対性の対極として、明白に意識されている。憧れを抱きつつも、その諦念も同時に深く刻印されているという点にベンヤミンの思考の動的展開の源がある。絶対的なものを単に捨象するのであれば、絶対的なものとの宥和の安らぎにひたるのと同様に、思考のダイナミズムは失われることだろう。

1-5 反復する対立と非宥和的二元性

ソネットでは、歌の響きによる充溢と、響きの喪失による沈黙とが対立構造をなして展開される。ソネットの5番の一連では、その「翼」に「風の歌」を担っていた者たちが「もはや決して鳴り響か」ないことが歌われる。しかし「お前」に「押し黙る *stumm*」ことを余儀なくさせた「天使」

¹⁶ この「絶対性」が汎神論的、一元論的な無制約性を意味するものでないことは、1912年のベンヤミンの『現代の宗教性についての対話』からも明らかであり、ベンヤミンがどのような時期においても、単純な意味で「絶対的なもの」への憧れをもっていたと考えるのは早計である。絶対的な本来性の安らぎと切り離れた形でベンヤミンにおける「超越」を論じたものとしては、次の論文を参照。Hirsch, Alfred: *Gespräch und Transzendenz*. In: Galber, Klaus u. Rehm, Ludger (Hg.): *Global Benjamin*. München 1999, S. 959-968.

が第二連では天上の風景のうちに湧いて勇気を流れ出させる「泉」へと「お前の吐息」を運んでいく。「お前」と「お前」が鳴らす「響き *Stimme*」を重ね合わせながら、呼び掛けがはじまる。

おお、お前よ、もう決して鳴り響かぬものたちが、溶けながら／山腹の鬱蒼とした不安へと沈殿していったのだ／その翼に積まれていたのは風の歌／だが感情の天使がお前を押し黙らせたのだ

おお響きよ、天使はその手にお前の吐息をにない／それを永遠に明瞭な涼やかさへと高めあげた／そこでは、清らかな丘の泉にお前が湧き出て／神に許されて、歓呼の声を上げる勇気を流れ出させる

ソネットという形式は、漢詩における絶句のごとく、起・承・転・結の構成をなすといわれる。ベンヤミンのソネットもおおむねそういう形をとるものが多いが、このソネットは典型的にそうだといえる。「決して鳴り響かぬ」押し黙りから一連が起こされ、「天使」によって受け継がれた二連では「響き」が高まる。三連では「灰色の朝の鳥の歌」への転換が起こる。

目覚めるのは、灰色の朝の鳥の歌／愛する者たちに留まるかと尋ねる／歌は、お前が静かな光の中に潜むのだと予感している

予感は、しかしおぼつかないままに、「正午」において歌は結ばれる。

若さのほとばしりが、ぶなの木々を包む／いつかお前の言葉がとどまった正午が／黙した者たちの肉体を、流れる時間のために、砕き分か

つまでは(ebd. S. 29f.)。

第一連で(夜の)山腹の鬱蒼とした不安に沈んだ響きは、(真夜中の)泉において勇気を取り戻し、薄暗い朝に目覚め、正午までほとぼしり、そして、ふたたび時間のうちに、沈黙うちに分かれたれていく。「お前の言葉がとどまった正午」は、それゆえたとえばツアラトウストラが語ったような「大いなる正午」ではない。ここでの「正午」はほとぼしる充溢が、永遠を指し示すのではなく、再び流れる時間のなかでの沈黙へ還る時としてある。「もう決して鳴り響かぬものたち」、「黙した者たち」の「肉体」は、ここで砕かれて、流れる時間のうちへと消え、木々をつつんだ「若さのほとぼしり」も消える。

別のソネットでは「突然の正午の明るさが私を吹き扇ぐのだが／穹窿の天から輝きだすのは／謎めいた目のような深い青い悲しみ」(ebd. S. 31)と歌われている。ここでも「正午」はその「明るさ」によって充溢を指し示すが、そこから輝きだす「深い青い悲しみ」によって同時に沈む。「正午」は、明るい響きと、悲しい沈黙の交代の場として、反復される。「反復する変転」¹⁷が連作詩全体の原理であると正当にもボイエが指摘しているように、ソネットでは響きと沈黙の二つの極が変転を繰り返す。ここで起こるのは、ベンヤミンがロマン主義に見たような無限の完成を目指した運動ではない。累乗的な上昇ではなく、繰り返し昇り、そしてまた沈む天体のようなリズムが反復されている。

この反復に何を見るべきだろうか？ ベンヤミンの一つの断念が、こうした反復を生み出していると、考えられる。ハインレの名の理念化、あるいはハインレのイメージの象徴化の断念である。この断念について論じる前に、このソネットの反復がささげられたハインレという若者がそもそも

¹⁷ Boie: a. a. O. S. 25.

ベンヤミンにとって、どのような存在だったのかをひとまず見ていこう。

2 ハイネのイメージ、ハイネの名

2-1 ハイネという若者

ベンヤミンは後年、草稿として残された「ベルリン年代記」の中でフリードリヒ（フリッツ）・ハイネについての回想を行っている。「フリッツ・ハイネは詩人だった」（GS. VI. S. 477）とベンヤミンがそこで書いていることもあって、ハイネは「失われた詩人」¹⁸ として理解されるが、実際は、「詩人」になるべく奮闘していた青年というのが、実状だったろうと思われる。「ハイネは詩人だった」と書いた後でベンヤミンは『人生』においてではなく、その詩作の中で出会った唯一の詩人」であったと但し書きをつけている。これはわかるようで、わからない但し書きだが、「人生」の中でハイネという「詩人」に出会った、というよりも、その詩作の中で「詩人」だと（再）発見したということではないかと思われる（例えばゲーテなどに会おうのも「人生」においてではなく、その「詩作」においてであると考えられるのだから）。いずれにせよ、「詩人である彼は 19 歳で死んだし、彼とは別の仕方では出会えなかった」という書き方からもわかるように、「死」がある意味ではハイネとその詩とベンヤミンとを分かちがたく結びつけていたのは確かである。

ベンヤミンがハイネと知り合ったのは、1912 年フライブルク大学にベンヤミンが在籍していた頃で、ハイネはまだ大学入学前だった。当時ベンヤミンはグスタフ・ヴィネケンを指導者とした学校改革運動に深く関わっていたが、ハイネもこれに芸術と文学の方面で参加するようになり 1913 年になって共に運動の中心だったベルリンへ移る。アーヘン生まれ

¹⁸ Vgl. Kraft, Werner: Über einen verschollenen Dichter. In: *Neue Rundschau*, Jg. 78, Nr. 4, Frankfurt am Main 1967, S. 614-621.

のハインレは、大望を抱いてベルリンにやってきたようである。ベンヤミンは自身も深く関わり、寄稿も行っていた運動の機関紙『アンファング』に、ハインレの詩の掲載を推している。だが、編集部はこれに難色を示し、掲載には至らなかった。¹⁹ そういった経緯もあってハインレは、1914 年 3 月頃、編集部を乗っ取ろうと行動に出るが、これは失敗に終わった。²⁰ ベンヤミンよりも 2 歳年少のハインレは「謙虚」(GS. VI. S. 477) でありながら行動においていささか過激なところがあったようである。その過激さが高じて、ベンヤミンとの間に葛藤が生じたこともあった。1913 年 11 月 1 日に『行動』誌が催した「文学の夕べ」においてベンヤミンが「青年 Jugend」と題する講演を行った際には、ハインレが突然それに異議をとなえ自らも講演をさせろと要求し、そのような場合に生じがちな「当人同士の生活全体を動員した醜い口論」がそこで繰り広げられた。後にハインレとともに自殺するフリーデリケ (リカ)・ゼーリヒゾンの助太刀の結果、ハインレは、ベンヤミンとほとんど同じような言葉づかいでなされるまったく同じ題の講演を、事態に驚く聴衆の前で行うこととなった。²¹ この出来事の少しあと、ベンヤミンは或る書簡で、両者の間の沈黙、ハインレとの微妙なずれ、両者が歩みより、再び友情をむすびつつも、「彼が必然的に己の精神にとどまらざるをえないこと」について書いている。そこでは、二人の親近性がすでに感じられていたがゆえに、それだけその思考の微妙な差異が有和させがたいものとして意識されている。こうした経緯を通じて印象的なのは、ベンヤミンがハインレの振る舞いについて、つねに落ち

¹⁹ Vgl. GS. II. S. 858

²⁰ こうしたハインレについての伝記的事実を伝えるものとしては次のものが詳しい。Wizisla, Erdmut: "Fritz Heinle war Dichter". Walter Benjamin und sein Jugendfreund. In: Jäger, Lorenz u. Regehly, Thomas(Hg.): *Was nie geschrieben wurde, lesen*. Bielefeld 1992, S. 115-131.

²¹ Vgl. GS. VI. S. 479.

着いた年長者の目線で語っていることである。²² 『アンファンング』乗っ取り事件に際しては、ベンヤミンが仲裁に入り、骨を折って場を収めている。最終的に収まったとはいえ、ハインレは『アンファンング』をめぐって『行動』誌の編集室で設けられた集まり（ベンヤミンはその場にいなかった）などでは、ハインレが何を答えても「罪あり」とされ、彼は「関連のつかない言葉を語り」「哀れな印象」を与えていたらしい。²³ 乗っ取りの失敗は彼にとってきつい挫折だったろうと思われる。ハインレの行動は栄光をつかむよりも、冷淡なまなざしにさらされていた。

第一次大戦勃発の直後、1914年8月8日に、ハインレは、ベンヤミンたちが活動の場としていた「談話室」で、恋人だったリカ・ゼーリヒゾンとともにガス自殺した。自殺の理由は「戦争への抗議」²⁴ からとされることもあるが、ヴィツィスラが推測しているように、おそらくそれだけではなく、上述の挫折のような背景も死を準備していたのではないと思われる。²⁵

2-2 若い詩人

ベンヤミンはハインレを評価してはいたが、必ずしも「天才」と崇めて

²² Vgl. Benjamin, Walter. *Gesammelte Briefe*. Hrsg. v. Theodor W. Adorno Archiv, Frankfurt am Main 1995, Bd. I. S. 181.

²³ 集まりには、ハインレと対立したバルビゾン、『行動』編集のフランツ・プフェムファート、ケーテ・コルヴィッツの息子などがいた。ケーテ・コルヴィッツの日記には「悲惨な集まりと悲惨な発言」という記述がある。Vgl. Wizisla: a. a. O. S. 120.

²⁴ Kraft: a. a. O. S. 614.

²⁵ 「ハインレにとって恥辱に満ちた事態の経過は、彼の自殺について別の光をあてている。彼の決断が、戦争の始まりによって引き起こされたのは確かだろうが、決断は、彼の大きな文学的野望の挫折によって準備されていた」。Wizisla: a. a. O. S. 120. ちなみに、自殺直後1914年8月10日の『フォス新聞』で、ハインレとリカ・ゼーリヒゾンの自殺について報じられているが、「愛の悲しみ Liebesgram」がその理由とされている。Ebd. S. 115.

いたわけではなかった。²⁶ だが、何か自分にはないものを彼に認めて友情を育んだこと、彼の詩才に惹かれていたことには疑いがない。『アンファング』がモットーとして掲げていた「新しい言語」、そうした言語を純粋に表現していく姿をベンヤミンはハインレに見ていたように思われる。ハインレの詩のどこをどのように評価していたのかは、残された資料からは、推測しかねるところがある。とはいえ、現在確認できる 1912 年頃までの〈若書き〉の詩²⁷ を評価していたとは思えない、ということでは評者の意見が一致しており、おそらくそれ以降の詩を評価していたのだろう。

12 年以降、ベンヤミンと知り合ってから以降のハインレは、後に「表現主義」に分類されるような詩人たち、ヤーコプ・ファン・ホッディス、ゲオルゲ・ハイム、アウグスト・シュトラムなど、ナンセンスと崩壊感覚が不気味に共存するような奇矯な詩を作った人たちと比較される。²⁸ ナンセンスで情景をはっきりと思ひ浮かべさせないながらも、音と言葉の美しさが際立つその詩について、クラフトは、「100 年にわたりドイツ詩の中心であった

²⁶ 例えば『アンファング』への文章掲載（「私のクラス」）にあたっては、ハインレの「未熟さ」を認めつつこれを擁護している。Vgl. GS. II. S. 861

²⁷ これらは、ハインレの友人だったルートヴィヒ・シュトラウスの遺稿から発見され、クラフトが紹介している。後にマルティン・ブーバーの娘婿になるシュトラウスは、ベンヤミンがハインレと出会う以前に、ハインレと親しかった（ベンヤミンはシュトラウスを介してハインレと知り合った）。ベンヤミンは、シオニズムの雑誌への寄稿を依頼されているが最終的にこれを拒絶した——これについては次のものを参照。Rabinbach, Anson: *In the shadow of catastrophe*. London 1997, pp. 35-43. —その後ハインレは、シュトラウスではなく、ベンヤミンと行動を共にするようになった。

²⁸ ベンヤミンやハインレの当時の行動圏は、表現主義的なベルリンの詩人たちと微妙に重なっていた。当時の「表現主義」は夜のカフェを拠点とした「文学的な青年運動」として性格づけられる。「談話室」を拠点としヴィネケンを支柱としていたベンヤミンたちの学校改革運動は、ベンヤミンにみられるように、より純粋な精神性を希求する中で「文学的な性格」を強め、結果として表現主義的文学の蠢きと出くわしていた。Vgl. Wizisla: a. a. O. S. 120. 大戦後に流行の隆盛をきわめた表現主義へのベンヤミンの批判は、流行以前の原風景を知っているだけに辛辣になっているのかもしれない。ベンヤミンが評価する「表現主義」の詩人は、みな大戦以前に、あるいは大戦が終わるのを待たずに死んでいる。

「形姿 *Gestalt*」を揺るがすもの」だったのではないかと解釈している。²⁹そして、この「形姿」への反対ゆえにベンヤミンがそれを評価し、ホーフマンスタール³⁰にはそれを拒絶されたのではないかと推測している。

「形姿」を美化する姿勢は、当時においては、ゲオルゲ派、特にグンドルフにおいて目立つものだった。「形姿」よりも「音」にその詩作の特徴がみられるハインレだが、当時ゲオルゲの詩にはとても親しんでいた。ベンヤミンも、近代の都会生活という自分たちに与えられた歴史的条件の矛盾を解かないままに、「ヘルダーリンやゲオルゲの言葉だけに場所を与えていた」(*GS. VI. S. 479*) 当時の自分たちの限界を振り返っている。彼がゲオルゲの強い影響化にあったことは間違いない。ハインレの自殺に関しても、ゲオルゲ的な犠牲の理念が働いていたのではないかと推測されており、そのためベンヤミンのゲオルゲへの態度はアンビヴァレントだが、ある「イメージ *Bild*」を「形姿」として、神聖化させることについては批判的であり、ゲオルゲ的なものから距離をとるようになっていく。ソネットにも、この足跡を辿ることができる。

2-3 犠牲と自殺

第一次大戦時、使命感からの義勇兵、祖国のために命をなげうつ犠牲を神話化する動きが広く見られた。その犠牲は民族の繁栄、民族の紐帯復活のための受難であり、国民共同体の絆をかためる存在の鎖は、「英霊」と

²⁹ Vgl. Kraft: a. a. O.

³⁰ ベンヤミンは友人 F・C・ラングを通じてホーフマンスタールの雑誌『ノイエ・パイトレグ』へのハインレの詩の掲載、あるいは詩集の公刊を期待していた。しかしホーフマンスタールがハインレの詩に「詩的精神の決定的な啓示を見出すことができなかった」ため、掲載は拒絶されている。Vgl. *Neue Rundschau*. Jg. 70, Nr. 3, Frankfurt am Main 1959, S. 419. ラングは、ハインレの詩が「後期ヘルダーリン」を思わせるとして、ホーフマンスタールへ肯定的に推薦している。

いうシンボルによって完成される。³¹ ベンヤミンが決別した G・ヴィネケンも、M・ブーバーも、精神への奉仕あるいは共有体験というシンボルによって、戦争への動員を促す発言を行っている。ベンヤミンは、言語を「精神」や「理念」の実現の単なる手段としてしまうことをブーバーに宛てた書簡で批判している。³²

言語の手段化を拒絶するのと並行して、ベンヤミンは、イメージを物神化して神話をつくりあげることにも批判的意識を向ける。1914 年、大戦勃発の直前に出たゲオルゲの詩集『盟約の星』においては、「生と死の美化」が行われ、マキシミン崇拝に象徴されるような、犠牲の理念化が見られる。³³ ハイネが自殺をする背景に、こうした死の美学化が影響を及ぼしていたことを後にベンヤミンは示唆している。「1914 年の春、災いを告知しながら『盟約の星』が地平上に昇った。戦争があったのはその数か月後だ。まだ何百人も死なないうちに、我々の中心にそれは突き刺さった。私の友人が死んだのだ。戦闘の中でではなかった。彼は或る名誉の野に咲いたのだが、それは人が死ぬようなところではなかった」(GS. II. S. 623)。「友人」ハイネは、ベンヤミンたちの活動の場だった「談話室」でリカ・ゼーリヒゾンとともにガス自殺を遂げた。「名誉の野」は普通「戦場」を意味するが、ハイネが死んだ「名誉の野」は彼の死に名誉を与えるものではなかった。

「戦争への抗議」という大義名分によって、ハイネの死を理念化することは、ベンヤミンにはできなかった。ハイネの死は、むしろ大義名分による犠牲の理念化との対決へとベンヤミンを促した。「ゲオルゲが私を

³¹ ジョージ・L・モッセ『英霊——創られた世界大戦の記憶』(宮武実知子訳、柏書房 2002 年) 59～76 頁を参照。

³² Benjamin, Walter. *Gesammelte Briefe*. Bd. I. S. 325-328. Vgl. Auch: Weber, Samuel: Der Brief an Buber vom 17. 7. 1916. In: *Benjamin Handbuch*. S. 603-608.

³³ Görling: a. a. O. S. 588.

いかに支配していたか、そしてその支配がいかにして崩れたか——これらすべては、詩の空間で、そして一人の詩人との友情において演ぜられたのだった」(ebd.)。34 つまり、ハインレという詩人との友情においてベンヤミンはゲオルゲに傾倒し、またハインレという死者との友情がベンヤミンのゲオルゲによる支配を崩した。

2-4 言語と詩人

「若さの形而上学」における「天才」批判にすでにその萌芽がみられ、「ゲーテの『親和力』」や後の「カール・クラウス」において明白に語られることだが、35 ベンヤミンはゲオルゲ派におけるように創造者としての詩人を崇拝することに批判的な姿勢をみせていく。こうした姿勢はソネットでも繰り返し見られるものである。ゲオルゲの言語については、時期を分けたうえで詳細に検討されるべきだが、さしあたりベンヤミンが批判したグンドルフがゲオルゲの言語について語るところを確認しておきたい。

今日、個人が革新の使命を感じたならば、彼の精神は、はじめからあらゆる媒介を必要とする職業から彼を遠ざけておかなければならなかった。直接の行動はもはや可能ではなく、言葉の二つの作用のみが採り得る方法だったのだ。すなわち孤独に予言的な言葉と、孤独に詩的な言葉。無条件に要求するか、または直接的に形成する言葉。この時代全体の彼岸に立って新しい世界を内にいいていた二人の孤独

34 ベンヤミンのゲオルゲへの傾倒と離反については、以下のものを参照。Alt, Peter-André: "Gegenspieler des Propheten"-- Walter Benjamin und Stefan George. In: *Global Benjamin*, S. 891-906, 川村二郎『アレゴリーの織物』(講談社1991年)、7~45頁。ベンヤミンとゲオルゲ・クライス全般については、平野嘉彦『死のミメシス——ベンヤミンとゲオルゲ・クライス』(岩波書店2009年)が詳しい。

35 *GS*. II. S. 359.

な人間は、革新の歴史的使命を果たすためには、言葉によって放電せざるを得なかった。³⁶

「二人の孤独な人間」とはニーチェ、そしてゲオルゲである。ここでは、彼らの「孤独に詩的な言葉」がそのまま「直接的に形成する言葉」として、墮落したブルジョワ時代の彼岸に立って、「歴史的使命」を担うものとされている。

ベンヤミンは、グンドルフのように、詩人に特別の生や使命を見出すことを批判する。そのような使命を代表するのは神話的英雄であり、詩人はそれとは区別されるべきだというのである。「生と本質と作品＝所業とが統一体を形成するのは神話的領域においてのみ」であり、そこでは「生きている形姿 *lebende Gestalt* となった所業が、本質の根拠と同時に、生の内実をも自らのうちに保持」する。そして「象徴的形姿 *Symbolgestalt* と、人間の生の象徴的内実が見通せる形で与えられるのはそこにおいてだけである」(*GS. II. S. 157*)。言い換えるなら、人間と神話的英雄の生とが異なったものだということを踏まえないと、人間である詩人の生を神話的象徴的形姿として祀り上げてしまう。これを回避するべきだとベンヤミンは考えている。

グンドルフは、「革新」という「歴史的使命を担う」「詩人」の言葉はそれ自体が形姿として、予言的な要求を果たし得ると語る。ベンヤミンは、このような「直接的に形成する言葉」を称揚することはない。

ブルジョワ的な言語理論を神秘的な言語理論によって拒絶するのもまた、間違ったことだ。つまり、神秘的な言語理論によれば、語そのものが事柄の本質になるが、これは正しくない(*GS. II. S. 150*)。

³⁶ Gundolf, Friedrich: *Stefan George*. Berlin 1920. S.2.

人間の発する語が直接的に何かを創造し、自律的形姿としてそれ自体が本質と化すことはないと言ベンヤミンは言うのだが、ここにはゲオルゲ的な言語からの距離が示されているだろう。人間の言語は、存在が内包する本質をあくまで認識するのであって、存在と本質を創造するわけではない。ゲオルゲ的言語からの離反のプロセスは、もちろん一挙に生じたわけではない。例えば、1914年から15年にかけて書かれた「ヘルダーリンの二つの詩」においては、「形姿 *Gestalt*」を中心に議論が展開され、「詩作されるもの」の「同一性」が貫徹されるのは、「英雄的詩人」の「形姿」においてだとされる。³⁷ このような議論は、ある意味ではゲオルゲ派的な枠組みの域で行われているように思われる。

1916年の段階でもベンヤミンは「純粋な言語的肉 *der reine Sprachleib*」について語っている。ただし、そこではそれを「抱擁」するのではなく、「遠くから濁りない空気を通して直観するように努力する」ことが重要だとしている。³⁸ 「肉」「形姿」に美を結晶させるようなゲオルゲ的道から

³⁷ 「ヘルダーリンの二つの詩」においては、例えば神と世界との間の二元性がめぐいがたい「詩人の勇気」に対して、ベンヤミンは、形姿化の限界までいきついて、詩人の運命において世界と神との歌における「同一性」が示される「臆心」を評価している。ヘルダーリンを論じて語られる二元性 *Zweiheit* は、歌の外のギリシア神話的連関（＝ミュトロギー）に依拠するがゆえの諸形姿の結合の不十分さからくるものである。だが、ボイエなども指摘しているソネットの二元性 *Dualität* は、「結合」が芸術的＝技術的に不十分であることからくるものではない。それは、そもそも英雄としての詩人の形姿において、同一性が担保されるような世界を断念しているところからくる二元性である。「形姿」が織りなす詩的世界が、「詩作されるもの」を貫く「同一性」によって規定されるのだとすれば、ベンヤミンのソネットは、「お前」と「私」との、「夜」と「昼」との間で生じる「対話」あるいは「総合」にいたらない「弁証法」によって規定されている。もちろん、ヘルダーリン論においても、「中間休止」にみられるような「冷静さ」が、形姿の放埒を戒め、引き締めるといったことがある。ギリシア的形姿化原理だけではなく、東方的な原理があって、はじめて「詩作されるもの」の空間が成立しているのだとする議論である。こういった議論も踏まえて、ソネットの二元性とヘルダーリンに見られたような同一性については検討しなければいけないのだが、それについてはひとまず措く。

³⁸ Vgl. Benjamin: *Gesammelte Briefe*. S. 329. ベンヤミンは、シェーンとは、「青

ベンヤミンは身をそらしていく。「形姿を含んだ時間は、夢の家の中で過ぎ去ってしまった」のである。³⁹ 1921 年後半に書かれていた「ゲーテの『親和力』」では、グンドルフを批判する形で、詩人と英雄を対比している。

英雄の生においては、その完全なる象徴的な明るさのおかげで、完全に形姿化されつくしたものの——その形姿とは闘争である——が現れる。それに対して、詩人の生においては、他の人間の生においてと同様、一義的に明白な使命など見出されることはない。のみならず、一義的に明白で、はっきりと証明できる闘争さえも見出されないのである。(GS. II. S. 160)

ゲオルゲが夭折したマキシミンのイメージを聖化し、グンドルフはゲーテやゲオルゲといった詩人を、「英雄と創造者のふたなりとしての詩人を、多重に召命を受けた<形姿>において把握したと間違っと思ひ込んで」(ebd.) のにたいして、ベンヤミンは死者ハインレの形姿に、一義的な使命や闘争を見出すことを禁欲したように思われる。⁴⁰ 例えばその死は「戦争への抗議」といった或る一つの理念的所業によって規定されること

年運動」以来の付き合いだったが、当時、お互いに詩をやりとりしていた。シェーンの詩を、「われわれが一緒にいた青年たちの口から出てきたほかのすべての詩とはまったく異なるもの」と称賛している。ベンヤミンは、シェーンや後に妻となるドーラなど一部を除いて、青年運動時の友人たちとの交流を絶っていた。

³⁹ 『一方通行路』に引用されていることもあり、ソネット評者によく言及される一節である (GS. IV. S. 86)。例えばティーデマンも、この「形姿を含んだ時間」の過ぎ去りに、ゲオルゲ的詩歌からの離反を見ている。Tiedemann: a. a. O. S. 89.

⁴⁰ ドイバー＝マンコウスキーはベンヤミンに大きな影響を与えた新カント学派を代表するヘルマン・コーエンの著作を参照しつつ、ベンヤミンにおける偶像の禁止について論じている。詩人の英雄化批判は、こうした文脈からも理解できる。

Deuber-Mankowsky, Astrid: *Der Frühe Walter Benjamin und Hermann Cohen. Jüdische Werte, Kritische Philosophie, vergängliche Erfahrung*. Berlin 2000, S. 96-105.

はなく、またそもそも「闘争」であったとさえ言い切ることがない。マーティン・ジェイが論じたように、ベンヤミンは、ハインレを象徴化して救済したり、その「犠牲」を聖化することはなかった。「慰め」を求めなかったのである。⁴¹

人間の生・詩人の生が英雄のような一義性を持ちえないという認識に基づいて、ソネットにおけるあの反復的構造と、残存し続ける二義性が生じてくる。ここでは、「お前」の「使命」も「闘争」も明白に理念的なものではありえない。だが、理念や使命や闘争が与えられていないわけではなく、理念的なものと結びつけられながらそれと完全に合致させて語ることが出来ないという曖昧さの領域をソネットは作り出している。神話的といえるほどに、完全な「形姿」であれば、救済や宥和の輝きを放つことも、あるいは在り得るだろうが、ソネットにおいては、イメージの微光がちらつき、押し黙る名前がかすかに響くのみである。このような曖昧でかすかなものといかに向き合うべきなのか、そして実際ベンヤミンがいかに向き合ったのか——彼のソネット作品はこうしたことのドキュメントとなっている。これは、一つの「形姿」に結実・肉化はしないとはいえ、結実前の種や芽をそのうちに秘め、それらが目覚めるのを待っている。

3 反復と目覚め

3-1 「象徴」と「没落」

ハインレという死者は、結ばれなかった幸福という＜動かしがたい石＞にしぼりつけられており、そこから切り離しがたい。死をなかったことにすることはできず、成就しなかった幸福を「神学」的思考の中で救済する

⁴¹ マーティン・ジェイ『暴力の屈折』（谷徹／谷優 訳、岩波書店 2004 年）3～32 頁を参照。ジェイは、ハインレの死に関わる経験において、ベンヤミンが死のモニュメント化に抗い、またトラウマ的ショック作用から目をそらすことをせず、「偽りの慰め」を避けたことを詳細に論じている。

こともできない。ソネットがたどるのは、ゲオルゲのように形姿化を貫徹させて、詩世界で死者を聖化するという道行ではなかった。象徴的なものによる救済が一方で語られつつ、他方で断念されていく。

「象徴 Symbol」はギリシア語の「一つに合わせる *symballein*」から来ていると言われる。⁴² 或るものが「別のものを語る」というアレゴリーとの対比でいえば、或る印と存在とが共にあって調和した輝きを放つことに象徴の本質があるといえる。ベンヤミンの『初期言語論』の文脈でいえば、創造に際して発された「神の言葉」と、人間の言語との共在が「象徴」において目指されていたと言える。「言語はいかなる場合でも、伝達可能なものの伝達であるのみならず、同時に伝達不可能なものの象徴でもある」（GS. II. S. 156）。「言語」は、伝達不可能なものの、伝達しがたいものを、「名」という言語的本質の精髓において「象徴」しようとする。『ドイツ悲哀劇の根源』では「象徴」に関して、「没落 *Untergang* を輝きださせるとともに、自然の変容した相貌が救済の光の中で束の間啓示される——これが象徴において起こることである」（GS. I. S. 343）と言われる。ここでの「没落」は、ちょうどツァラトゥストラが「超人」を来たらせるために太陽の「没落」（＝日没）を欲したように、啓示のための準備としてある。象徴において、沈みゆく日は変容されて美しく輝く。ベンヤミンのソネットにおいても、確かに太陽が沈むとともに、昇りくるものがある。

日はその光からなる恩寵を私から遠ざける／最後の時間には、黄金でもって雲の縁が飾られる……かなたの太陽から斜めに射してくる光は／地平線にその灼熱を授ける／日が沈み入り、わたしの愛するものが現れ出る（GS. VII. S. 43）。

⁴² Wellek, Rene: Symbol and Symbolism in Literature. In: Wiener, Philip P. (Ed.): *Dictionary of the history of ideas studies of selected pivotal ideas*. New York 1973, vol. 4. p. 337-345.

直接照らし出す光はあまりにまぶしく直視できるものではない。それが恩寵を孕むものであったにせよ、日の光は「私」を近づけさせない。そのような昼の光が沈むとき、例えば宵の明星や、黄昏のバラの赤さが、暗さを背景として際立つ。このような夜の光について、ベンヤミンは例えば次のように言っている。「グリュネヴァルトは、聖者たちの光輪を濃緑の黒から浮かび上がらせたことによって、彼らを偉大なものとして描き出した。光を放つものは、それが夜の中で屈折するところにおいてのみ、真なるものである」(GS. II. S.130)。訪れ来たる夜の薄暗がりの中であってはじめて浮かび上がるものがある。「わたしの愛するもの」も日が沈んではじめて浮かび上がってくる。その意味で「没落」は、象徴的な「変容」の前提である。

ソネットでは夜の中で浮かび上がってくるものの予感が繰り返し歌われる。だが「変容」は必ずしも「恩寵」をもたらすのではなく、むしろ、予感をうちのめし「悲しみ」へと落ち込ませるものともなる。そのとき「没落」の後の「晩」は「甘美な生」を湛えつつも、「黒い縁」から浮かぶものが聖なるものを讃えることはない。「自らの上にくずおれて、私は晩に坐していた／そして私の周りで動くのは、お前の甘美な生……眠るがごとくに、私は自らの髪の花環を／暗い時間のうちのお前を、手探る／／やはり私の周りを踊っていたのは／お前ではなくその外套だった。黒い縁から浮かぶ／お前の相貌は、私の口から頌歌を奪い取ったのだ (GS. VII. S. 44)」。すでにあげた 61 番では、「名」が「死装束」として硬直して身を閉ざす様が歌われていた。ボイエが言うところと違って、「名が肉を得て失われた体の補償となる」⁴³ ことはなかった。ここでの「外套」はむしろ肉体を感じさせずに、虚空に踊っている。そして「黒い縁」から浮かぶ「お

⁴³ Boie: a. a. O. S. 34.

前の相貌」は「私」に「頌歌」を歌うのを許さない。ここでもすでに一章でみたような反復が生じている。ソネットを形成する、浮かんでは沈むリズムは、日の「没落」とともに、薄明るい宵の明星のような淡い予感をもたらし、そして、その予感をまたしばませる。

この反復から何かが演繹的に導き出されることはない。だが、この反復の中へ還っていくことは、ベンヤミンにとって単なる無駄な耽溺ではなかっただろう。「哲学的観想においては、現実的なものの内奥から言葉としての理念が解き放たれるというのが重要」(*GS. I. S. 217*)であるとすれば、そして、その「観想」に求められる「怠惰ならざる息遣い」は、「辛抱強く、たえず新たに思考が開始され、こと細かに事柄そのものへと還っていく」ようなものでなければならない(*GS. I. S. 208.*) のだからである。「追想」の反復、その反復への没入は、体験してはいたが見ていなかったものを呼び起こす。

3-2 イメージと過去

ヴェルナー・クラフトは、ハインレの残した詩の一つについて「目立つのは直観の不確かさである。だが詩は音の美しさをもっている」といつている。⁴⁴ 直観的イメージが、絵のように浮かび上がってくることがないということは、ベンヤミンのソネットについてもあてはまる。これは理由のないことではなく、現前する像の直観よりも、理念の根源的聴き取りを重視するベンヤミンの志向⁴⁵ に由来するものと考えられる。「もろもろの

⁴⁴ これは「疲労」と題された詩について言われていることである。「訪れた夜の不安は／髪かきむしる疲れた手のようだ／そして遠くからは声が響き／私はおまへのまどろみへと沈んだ／そして耳をすまし霧がかかるのを聞いた／それは黒い夜をまくり上げた／飛び上がった雨は鳥のようだ／そしてすべての光が静かに揺れた」。*Kraft, Werner : a. a. O. S. 617.*

⁴⁵ このような形で言語を重視していたベンヤミンだが、20年代半ばからシュルレアリズムなどに触れるにしたがって、言語をも含みこむようなイメージの力学へと

イメージが現前するのを直観することが重要なのではない。むしろ、哲学的観想においては、現実的なものの内奥から言葉としての理念が解き放たれるというのが重要なのだ。……哲学的観想において理念は新たにされなければならない。このような理念の新生は、言葉の根源的聴き取りをふたたび復興させる」(GS. I. S. 217)。言葉によって輝き出る図像を作り出すという志向とは反対に、ベンヤミンは言葉でイメージを紡ぐ中からいわば、かつて自らによってさえ見られることのなかったものを、聴き取ろうとする。

ソネット 36 と 37 にはフライブルクでのハインレとの記憶が「ミュンスター」大聖堂の名とともに刻まれている。38 においては「お前のイメージが輝きのうちに映し出されるのを見つめるハーヴェルゼー」というふうにベルリン時代の記憶が織り込まれている。かつて夏の散策の中で眺めた風景をベンヤミンが思い起こすのは、おそらく冬だった。

北に一つ星が昇っていた／われわれだけが知っていた夏の日に／親
しげな隊列を組んだ谷が沈黙していた／

澄みきった空気の中に浮かぶ山頂は、夜に黒く燃えた／それはおまえ
の分厚い髪の中で沈んで消えた／そして冬には、魔術的に合図を送り
ながら微かに輝く。(GS. VII. S. 46)

かつての光景——「われわれだけが知っていた夏」——は、沈黙の中で沈み眠っている。この光景は一度完結して閉じたものであるが、追想の中で「魔術的に合図を送」ってくる。かつてのイメージはある意味ではすでに

思考の焦点を移していく。初期ベンヤミンにおけるイメージ論に着目しながらこうした移行を論じた森田前掲書の議論も参照。

硬直した「形姿」と化して、ハインレの「死」の周りに集まっているのだが、ベンヤミンはこの形姿の布置から、今へと送りだされてくる微かな輝きを聴き取ろうとしている。「イメージ」はそのつどの気分に浮かぶ表象とは違って、それ自体が所与の存在としての権利を保有している。これを聖化するのは間違いであるが、かつてのイメージが過去のものとなっても残存していることはイメージの重要な特性として認められねばならない。流れ去る時間の中におかれた生とは違って、過去のイメージは、いわば死んでいるが、それゆえにある種の権威をもち、基点としての役割を持ちうるのである。

過去は震え、魂を与えられた者のうちへと入る／踊り手の心に、絶えず踊りが残り続けるかのように／たとえヴァイオリンが後の帰郷に際して沈黙するにせよ／彼が森の響くなか歩むのに、雲は付き従う

あらゆる本質が立ち寄り泊まるために招かれているのを聞け／彼の死は、ちょうど枝を伸ばすサンゴのように育ち／計り知れない夜々に受け入れられる／見事な調度として死が選ばれたのであれば……

疲れることを知らぬ浄められた者の王錫／それは時間によって破壊されることのない物体／そして南十字星のように輝く

神々は彼をつかまえて、基点として示したのだ／生きながらにして神々に遣わされたものは笑われるがゆえに／死者である彼が神々の手のうちにあるのだ（GS. VII. S. 37）。

ここでは死者のイメージが、「見事な調度」、「王錫」として「南十字星の

ように輝く」ことを許されている。過去のイメージが「時間によって破壊されることのない物体」として、星として存在しているのである。この「基点」はしかし、聖別されて永遠に輝き続ける不動の星ではないだろう。ソネットでは、残存するかつてのイメージはそのまま輝き出るのではなく、またイメージにふたたび魂が吹き込まれるのでもない。ベンヤミンは、過去のイメージをソネットに織り込み連ねながら、かつて存在しながらも、現れたことの無かったイメージを到来させようとして、言葉を連ねる。この言葉の連なりは、目的へと演繹的に至るようなものではなく、過去の瓦礫の間を繰り返しい回りながら、イメージが浮かぶのを待つものである。

取り残されてしまった過去が、いわば「瓦礫」のように堆積していること——これは、晩年の『歴史の概念について』にまでみられるベンヤミンの思考の一つの核心である。⁴⁶ こうした思考は、すでに 1913 年冬から 14 年初頭にかけて書かれた『若さの形而上学』にみられる。3 つのテキストからなるこの文章だが、その最初におかれた「対話」では、「若さ」について、これから来たるべき未来との関係においてではなく、むしろゆるがせにされた「過去」との関係において語られる。日々の「対話」の中では多くのものが見逃されている。そこで取り逃がされて過ぎ去ったものはいわば瓦礫をなして堆積している。人は多くの力を行使しながら、さながら眠っているが如く多くのものを見過ごしている。

日々われわれはさながら眠っているものごとくに測りがたい諸力を行使する。……炯眼によってしても、自分たちの力が積み上げた瓦礫の山が照らされることは滅多にない。われわれは、心臓の鼓動によ

⁴⁶ こうした思考は、例えば、カフカ論や『1900 年頃のベルリンの幼年時代』などであらわれる「意識的な体験から常にのがれ出て行くものを具現する」「せむしの小人」のモチーフに凝集して現れている。Vgl. Deuring, Dagmar: “Vergiss das Beste nicht!” Walter Benjamins Kafka-Essay. Würzburg 1994, S. 27.

って重荷を背負い、モノを消化しているが、それに気づかないのと同じように、精神に慣れきってしまったのだ。いかなる対話であれ、その内実は、過ぎ去ったものをわれわれの若さとして認識することにある。そして、瓦礫の荒野に積もった精神の塊への驚嘆が対話の内実なのだ。いまだ我々は父たちと「自我」とが対峙する無音の闘争の場には目を向けてこなかった。我々がそれと知らずに打ち砕き、ほうり上げてきたものに、今や我々の目は開かれている。対話というものは、ゆるがせにされた偉大さを嘆くものなのである（GS. II. S. 91. 傍点引用者）。

「対話」に、単なる「おしゃべり」以上のものをみようとするのみならず、その中で過ぎ去ったもの、「ゆるがせにされた偉大さ *versäumte Größe*」にこそ着目するのは、いかにもベンヤミンらしい。ゆるがせにされて過ぎ去る「沈黙」から、意味をくみ出してこそ、はじめて「対話」が生きてくる。いずれにせよ重要なのは、＜過去に潜在するもの＞をベンヤミンがテーマとすることである。過去は単に過ぎ去って消えたものというよりも、消えてしまったからこそそこにあったものの意義が再び問われるようなものなのである。そして、ここで問題にされているのは、＜偉大であるにもかかわらずゆるがせにされてしまったもの＞の問い直しにとどまらないただろう。＜ゆるがせにされてしまったもの＞を問い直す中で＜気づき＞にこそ偉大さが宿るということをおそらくベンヤミンは考えていた。このような着想から、後にベンヤミンは過去の「追想 *Erinnerung*」に大きな意義を見ていくことになる。

3-3 追想の翼

ベンヤミンは 1929 年の「ブルーストのイメージについて」で体験と追

想の違いについて、次のように言っている。

体験された一つの出来事は有限である。すくなくとも、体験という一つの圏域において結び閉じられている。追想された一つの出来事は枠をもたない。なぜなら、そこで現れるのはただ、そのあとに起こる、あるいはそれ以前に起こったすべての出来事を開ける鍵なのだからだ (GS. II. S. 312)。

「追想」は、起こった出来事を動かしがたい一点に固定するものではない。むしろその出来事から広がる連鎖——実際に起こったことも、起こらなかったことも含めた連鎖——へと想念を展開していくための「鍵」である。⁴⁷ 単にプルーストあるいはベルクソンの思想にふれたがゆえにこのような「追想」の考察が生まれたのではない。ソネットでのひたすらな「追想」の展開がなければ、ベンヤミンがこのような洞察にいたることはなかっただろう。

「追想」される過去には独特の意義が認められるが、それは例えばプラトンにおいて想起されるイデア界のように華々しいものではなく、それはささやかにひそんでいる。「追想」が切り開く「永遠」があるとすれば、それは決して「プラトンやスピノザのような人が、一度翼を羽ばたかせることで到達したような高次の領域」としてあるのではない (ebd. S. 320)。

「翼」のモチーフ、そして尾羽がおりなす「彗」のモチーフがソネットに繰り返し現れる。その「翼」は無時間的に安らう永遠のイデア界へと

⁴⁷ このような「追想」は、かつて体験された出来事の動かしがたさを確認するのではなく、むしろ動かしがたさを脱臼させ、そこに孕まれている潜勢力を指し示す。「過去」は、そうある他なかった「動かしがたい石」のではなく、そうでないこともできるという可能態としての位置を占めている。これについてはジョルジョ・アガンベン（ジョルジョ・アガンベン）の議論を参照。『パートルビー——偶然性について』（高桑和己 訳、月曜社 2005 年）。

飛翔するのではない。「翼を与えられて歩み出るのは追想」である。そして、「襞」には「過去」が何重にもたたみこまれている。

潤った草地で、お前たちの相貌が広げるのは／英雄のための安らぎ――
喧騒に疲れて甘く休らう／そこでは、追想が翼を与えられて歩み出る

悲しみにやつれて耳をそばだてる者を暗さがつつむ／メロディーは沈み、
青さの鏡に映しだされる／だが、近くの陸地は曙光によって封印を解かれる（GS. VII. S. 31. 傍点引用者）。

翼を与えられた「追想」は「耳をそばだてる者」を「暗さ」で包みもするが、「追想」とともにのぼる「曙光」は、天ではないにせよ、広がる想念の「陸地」を照らしはする。「追想」は一举に遠くまで飛ぶものではなく、行きつ戻りつしながら徐々に封印を解いていく。そのような運動の繰り返しの中で、過去が織りなす襞の隙間から、新たに何かが見出されるのである。

ベンヤミンが「追想」において目を向けるのは、永遠への飛翔それ自体でも、飛翔した先の永遠でもない。過去へと飛翔する追想の羽と羽の間に織りなされている「襞」にその目は向かう。「窓の光を引き抜くように／複数の亀裂を通りながら、翼は銀色にうなる／……／私の星、眠りの支配する星／それはふいに、燃え立たせられた／尾羽のなす襞のごとく（GS. VII. S. 48. 傍点引用者）」。銀色の翼でもって、天界を飛翔することは惑星たちに見張られる中では許されていない。「眠り」に支配される中で飛翔はしないが、「私の星」は「尾羽のなす襞」のごとく燃え立つ。過去に羽ばたいた翼の襞には、若さの躍動が、機を逸してしまった痛みしさが、獲

得された栄光が、ゆるがせにされてしまったものが、多くの過ぎ去ったものが密かにたたみこまれている。羽ばたく動きの一つ一つにはいわば過去が共振しているのである。この振動こそが壁から読み取られるべきなのである。ソネットは、単に虚しく無力な嘆きを響かせるのではなく、「過去」を今に響かせるのである。

3-4 静止状態の悲しみと名

繰り返し紡がれる「追想」の中で、「沈黙」の内に閉ざされていた「名」が開かれることはあるのだろうか。「追想」の反復は、ただ悲しみに閉ざされるだけなのだろうか。ベンヤミンのラジオ放送について書いたジェフリー・メールマンは、フロイトを引きながら「模倣」と「反復」を区別しつつ、次のような示唆的なことを言っている。

遊戯の美点は模倣 (*Nachahmung*) ではなく反復 (*Wiederholung*) にある、というベンヤミンの強い主張が重要である。なぜなら(親の)模倣はナルシズムの類のもの、ベンヤミンが必死に遠ざけようとしていた主観主義的な心理学化に類するものだからである。それに対して反復は、克服を目指すものであるとはいえ、最後までそのトラウマ的な、あるいはカタストロフィックな誘発・結合作用を保ち続ける。

48

バロックの「悲哀劇」がアレゴリーによって際限なく遊戯にふけるように、ある意味では、ベンヤミンのソネットも悲しみを反復する遊戯であると言えなくもない。メールマンが言うように、そこにおいて「トラウマ的な誘

⁴⁸ Mehlman, Jeffrey: *Walter Benjamin for Children: An Essay on His Radio Years*. Chicago 1993, p. 5.

発・結合作用」が繰り返し蘇ってくることが重要である。神話化を避けたベンヤミンは、ソネットを理念の模倣として作り出すことを避けた。そのような中での無限の哀悼作業が、宥和にいたらない「中途半端な弔い」であるという批判もあるが、強引な宥和は、「トラウマ」を解消するだけでなく、過去を駆動していた作用、そして過去と今を結びつける力をも同時に忘れ去らせてしまうだろう。

ソネットにおいて滞留する悲しみの中では、空虚を突き付けられる不毛さがただ反復されるだけでない。そこには新たな誕生の季節の回帰も同時に予感されている。一方で歌われるのは、「死」とともに、星の静止とともに時間がとまり、四季も止まるという経験である。

かりにお前が死に臨むのを世界へ預言していたならば／自然はおまえに先駆けて死んでいただろう／願いを聞き入れぬ掟とともに／存在は、永遠の忘却へと帰った

天には穏やかな朝の光が立ったことだろう／おまえのまとう肉がすべり落ちたとき／森はすべての黒い苦しみを染めた／静かな船の上で、夜は海を覆った

星々から作り出されるのは名もない悲しみ／天のアーチの傍らにはおまえのまなざしの記念碑が／暗闇と、厚い壁によって守りをつくる

新たな春の光は天へ引き上げられてしまい／静止状態の星々の中で／お前の死を映し出す水瓶から四季がのぞき出ている（GS. VII. S. 28. 傍点引用者）。

「静止状態の星々」は「名もない悲しみ」にベンヤミンを浸すと同時に、同時に静止した時間の中に「おまえのまなざしの記念碑」を打ち立てている。いまだ「名」を与えられていない「悲しみ」が、静止状態において保存された「死」を、救済と結びつけることのないままに嘆いている。そうである以上「お前のまなざしの記念碑」は弔いを完遂することなく無言でそびえるのみである。それは「忘却」されぬように「死」をとどめ、守っているのだろう。「ベンヤミンの死との情事」⁴⁹は、決して触れられない天空に保存されたプラトニック・ラヴであったと言えるかもしれない。いずれにせよ静止状態においてとどまる「死」は記憶を永らえさせる。そして悲しみが繰り返すその周りに集まってくる。

3-5 動き出す四季、蠢く種

ソネットは悲しみを理念へと（間違って）昇華させることなく、それを「死」の周りへと繰り返す集めながら、「名」の周りに過去のイメージを呼び求める。まだ「名」を与えられずに漠として滞留する「悲しみ」は目覚めの中で新たなイメージを浮かび上がらせるだろうか。静止した時間は再び動き出すだろうか。上でみたように星々は「死」とともに静止し、記憶とともに永らえる。それに対して「星の涙」は流れる時の中に落とされて消える。

泣くときであっても、星々のたたずまいは笑いのよう／星々は重い滴
が降り落ちるなかで育ったのだ／そして雨が止んでもなお、星々は濡
れて香ったのだ／

⁴⁹ ベンヤミンが「死」というものに、いわば憑りつかれていたことは様々な角度から指摘されている。Vgl. Chow, Rey: Benjamin's love affair with death. In: *New German Critique*. Nr. 48. New York 1989, p. 63-86.

星の涙に満たされて語りだした事物／それらにはまだ名が与えられずに／庭の葉のように語るのだ (GS. VII. S. 29)。

雨＝涙が止んでもなお、星々が放つ香りは永らえ続ける。静止して永らえる星のうちに「死」は保存されている。その周りに集まった悲しみは、時間の中へ星の涙を流れ落とさせる。そしてそれに満たされた事物が、季節の過ぎる中で落ちた葉のように語り始めるのである。庭の葉に誰も名を与えないように、事物は名前を与えられることもなく、名づけることもなく、しかしそれでも語りだしている。「追想」は「死」という動かしがたい過去を動かしはしない。しかし、「死」をめぐる反復の中で時は動きだし、事物の沈黙が破られる。「追想」は過去を思いつつ、下方へと流れ落ちて沈むのだが、落ちたところからはまなざしが昇ってくるのである。

取り残されたモミの森から、黄泉の流れの安らぎへと／静まることを知らぬ追想がなんと急ぎ流れ落ちることか

そこでしかし、不変の法則のごとき道行の足元を、青い波が涙で濡らし／不変の道に滞留しつつ、そこからまなざしを上げる／最後の意味とともに、友に寄り添いながら (GS. VII. S. 51)。

死んだ「友」に「寄り添いながら」流れ落ちた涙は、事物を語りださせたように、まなざしを上に向けなおす。「友」の無数の影を繰り返す甦らせようとするのは「死」に耽溺するためではない。ベンヤミンはフェティッシュとして「死」を崇めるのではないのである。彼は、「死」の「沈黙」の内に秘められて、密かに外へと開き出ようと蠢いているもの、それが芽

吹くのを待っている。ソネット第一群 50 編の最後を飾る一編で、かつて「天へ引き上げられてしまった」「新たな春の光」が、「青ざめた冬」を越えて再び訪れる。

想念は燃え立ち、ひざまずき、傾く／自らを冷やすべく時間のキイチ
ゴへと近づく／だが、それがたずさえる鏡が再び示すのは／ただ彼の
み。同じ苦しみが起こったのだ

夜も昼も、悲嘆に焼き尽くされて黙り込み／彼が熱に浮かされている
のを見た憧れは残り続ける／彼が慰めに「然り」と承諾するまで／そ
して物言わぬ許しの讃歌が示しだされるまで

イメージもしるしもすべてさらわれて／解き放たれたまなざしは入
り込んでいく／高き悲しみの回帰線へ

そこでは青ざめた冬から、新たな若枝が立ち上がり／そのガクのなか
で子種がうたたねしているのだ／讃えられた名から来たるべき子供
らが (GS. VII. S. 52)。

一番はじめのソネットでうたわれた「讃えられた名」はその「標徴」を打ち立てるように顕現することはなかった。しかし、「イメージもしるしもすべてさらわれ」ながら、「悲しみの回帰線」へと「まなざし」が入り込んでいくとき、ただ「同じ苦しみが起こ」るのではなく、新たな季節が巡りだす。季節は動かしがたい過去の「同じ苦しみを永遠に反復するのではなく、新たな目覚めを孕んでいる。「名から来たるべき子供ら」が、「子種 Samen」のうちで春を予感しつつうたたねしているのである。

ここでの「讀えられた名」は響きだす前のものであるが、「沈黙」に沈むだけでなく、「沈黙」の中には蠢めくものがある。この蠢きは単数の「名 Name」のうちにおいてではなく、複数の「名 Namen」から振動してくる。複数の「子種 Samen」たちと韻において響きあいながら、春を待つのである。

ハインレというひとつの「名」にしばりつけられつつ、悲しみを反復したベンヤミンのソネットが蒔いた種は、星のように静止した死者の「名」から、下方へと散りばめられ、無数の「名」に宿っている。ベンヤミンの悲しみの反復は、星において象徴的輝きをもたらすのではなく、同じ軌道をたどりつつ昇っては沈んだ。ここに求められていたのは悲しみの永劫回帰ではなく、反復の中での目覚めだったのである。ベンヤミンのソネットには、ひとつの「死」を忘れないための、しかしそれに閉ざされないための祈り、終わらない弔いを反復しながら別の目覚めを待つ祈りが繰り返し響いているのである。

おわりに

ベンヤミンのソネットにおいて見られる果てしない反復のリズムは、『ドイツ悲哀劇の根源』においてみられる、際限のないアレゴリーの運動と相応するものだろう。繰り返し空虚にいたりながらも、最後に反転と目覚めが予感される点も似たものがある。『ゲーテの『親和力』』におけるオティーリエの星のイメージ、『パサージュ論』その他で語られる「壁」のモティーフ、『短い影』などにみられる「思考像」——これらの解明にソネットの読解が大きな助けともなるだろう。

ソネットでは「象徴」による変容と救済が起こらず、その不可能が絶えず確認される形で、悲しみが反復されていた。生の流れの中では、そこから永遠へと引き上げられるような救済の瞬間が訪れることはない。はかな

さのうちに、多くのものが過ぎ去っていく。ベンヤミンは「死」という静止状態において、ハインレとの間にあったイメージを忘却から守っていた。そして、追想の中で、かつて見られなかった潜在的なものの種を育てていた。メランコリックな沈潜と言ってしまうと、それだけのものだが、沈潜する者がやはり目覚めを待っていることを見なければならぬだろう。問題は、そこから何が生まれ出るかである。ハインレが蒔いた種、ソネットへの沈潜が蒔いた種は、やがてベンヤミンにおいて芽吹くことを我々は知っている。死者たちの救済というものがあるとすれば、輝かしい者として栄光に包まれることにおいてではなく、そのような新たな目覚めを共にすることにおいてなのかもしれない。